



ベルギー・ブリュッセルで開催された国際シンポジウム (2019年10月 ブリュッセル自由大学 The Vrije Universiteit Brussel)

危機の時代を共に生きるために — 新たな人文学の展開をめざして

文学部長・人文学研究科長 奥村 弘

新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、私たちの大学にも大きな影響を与えています。3月の卒業式は行えず、4月、桜が咲く文学部のキャンパスで新入生を迎えることも出来ませんでした。後期に入ってやっと対面授業を一部再開しましたが、なお多くの授業が遠隔で行われるという厳しい状況が続いています。教職員一同、ひとりひとりの学生の学びを止めないための努力をつづけておりますが、日常とはほど遠い状況の中で、かならずしも十分な対応が出来ていないことをお詫び申し上げます。

昨年度、みなさまに文学部が創立70年を迎えたこと、その中で新たな人文学の教育研究の視座を見つけ、それを教育研究に生かしていくことをお伝えしました。新型コロナウイルスが拡大する直前の段階で、その取り組みは大きな成果をおさめることができました。

一昨年3月に70周年記念のキックオフ国際シンポジウムとして行われた「『MANGA』—人文学研究の新展開—」は、昨年度末に、神戸大学出版会から『マンガ／漫画／MANGA —人文学の視点から』として、刊行することができました。マンガの持つ多様な機能を人文学の新たな素材として、多様な領域から光を当てたものとして興味深いものとなっております。ぜひお読みいただければと存じます。

また昨年10月、神戸大学がブリュッセルで開催した文化遺産についての国際シンポジウムの成果は、本学と国立歴史民俗博物館、EU委員会での議論を主導するハンガリーエルテ大学・同国立博物館、イーストアングリア大学との研究協力協定へと結実しました。また7月の北京外国語大学、11月の北京大学、復旦大学との国際シンポジウムも大きな成果をおさめました。それぞれ今年度も開催を決定していたのですが、対面では行えず、リモ-

トでの開催を模索しています。

さらに神戸新聞社の協力のもと、昨年10月から神戸新聞紙上ではじまった一面全体を使った大型寄稿「21世紀の人文学—危機の時代を共に生きるために」も好評を得て、12回を数えています(神戸新聞のホームページのエッセー・評論欄で読むことが出来ます)。新聞社と議論を積み上げ、多様な方向から評論を載せる本研究科の取り組みは、おそらく日本ではじめての試みであり、大学と社会とをつないでいく新たなモデルになるものと考えています。

私たちが連載で掲げた「危機の時代を共に生きるために」というテーマは、新型コロナウイルス流行下で、重要性を増しています。今年度は、厳しい教育環境ではありますが、これまでの私たちが積み上げてきた成果を、それぞれの専門領域を基礎として、学生の皆さんへしっかり伝えたいと考えております。このような教育研究を支えるために今年度も「神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立70周年記念事業募金」を進めております。大学の教育研究環境が全体として困難になる中で、昨年度、多くの方々から御寄付をいただき感謝しております。引き続き、御支援、御協力のほど、よろしくお願いいたします。

CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2～3
最近の著作から	4～5
報告	6
イベント	7
近況／編集後記	8



日本人は「日本」をいかに理解してきたか

齋藤公太 講師

専門は近世・近代の日本思想史・宗教史。主な業績として、『「神国」の正統論——『神皇正統記』受容の近世・近代』（ペリカン社、2019年）など。

2020年4月に留学生担当講師として着任しました。授業やインターナショナルアワーでは留学生に向けて日本文化について解説することが多いのですが、「日本文化」とは何かという問いは私自身の研究にとっても中心的な問題です。

もっとも現在の日本研究では「日本文化」や「日本的なもの」の近代的な構築性が強調される傾向にあります。私の研究はそれを前提としてふまえつつ、過去の人々が「日本」や「日本人」であることをいかに理解してきたかという問題を、より広い歴史的視野から再考することを試みてきました。とりわけそうした「日本」や「日本人」をめぐる自己理解と、近世・近代の政治思想史、宗教思想史との関わりを研究しています。具体的には天皇や神道をめぐる議論を主な対象としてきました。

博士論文で取り上げたのは南北朝期に書かれた『神皇正統記』の受容史という問題です。北畠親房に著わされた同書は近世・近代を通じて読み継がれ、皇位継承に関わる「正統

という概念や、三種神器に象徴される政治倫理としての「神道」をめぐって問題系が形成されていきます。博論はそのような解釈と論争の系譜をたどり直すものでしたが、現在ではそこから派生して以下のような研究を進めています。

一つは垂加神道や国学など、近世の思想史に関する研究です。たとえば垂加神道による『古事記』『日本書紀』の解釈や、「垂加神道」という概念の形成過程について研究しています。また近代の思想史についても研究を進め、井上毅の補佐として知られる国学者・池辺義象の祭政一致論や、植村正久、海老名弾正といったキリスト教思想家による神道論、天皇論を取り上げています。近代の国家神道や教派神道、教育勅語に関する研究でもこれまでの研究成果を生かすことができないか、少しずつ模索しています。

最後に職務と関わることですが、様々な活動を通して日本研究の国際交流に貢献することも、研究者としての大きな目標の一つです。



言葉の意味・使用のメカニズム

澤田 治 准教授

専門は、言語学（意味論・語用論）。主な業績として、*Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface* (Oxford University Press, 2018)、“An utterance situation-based comparison.” *Linguistics and Philosophy* 37 (2014) などがある。

2019年10月に人文学研究科・文学部に赴任しました。専門は、言語学で、意味論・語用論という分野を研究しています。意味論・語用論は、言葉の意味・使用について研究する分野で、研究の範囲も非常に広いのですが、私はとりわけ程度性（スケール）に関わった意味現象に興味をもっています。たとえば、日本語の程度副詞「ちょっと」は、「この本はちょっと高い」というように、事物の程度を表すことができますが、「ちょっと、ハサミありますか？」というように発話の押し付け度を和らげることもできます。このようなスケール表現の二重使用現象は、日本語以外にも見られるかなり一般的な現象ですが、スケールという概念が事物の計量や比較の際に使われるだけでなく、対人関係や会話の流れを調整する際にも使われるという現象は、言語と認知・コミュニケーションの関係を探る上で、理論的にも重要な現象と言えます。

また、最近では、スケール表現の生起環境についても研究しています。たとえば、副詞の「とても」には、「僕にはと

てもできない」というように否定を強調する用法があり、否定環境では自然に使えますが、「僕にはとてもできる」のように肯定環境に現れると不自然となります。このような現象は、スケールが文法環境とも深く関わっていることを示唆していますが、その背後にあるメカニズムについて考察しています。

共同研究としては、日本語や英語の感嘆表現（太郎が来るなんて！/That Prof. Smith should be here!）の意味解釈や、コーパスデータと理論の接点についての研究にも取り組んでいます。

研究の際は、抽象度の高い理論や論理学の表記なども使いますが、身近な現象の中に、しばしば言語の本質を考える上でのヒントやアイデアがあり、理論と現象の両面を見ることで興味深いアイデアや考え方が出てくるように感じています。言語学は様々な学問分野と接点がある点も魅力の一つだと思います。これから先生方、学生、OB/OGの皆さんといろいろとディスカッションができれば嬉しく思います。



意識の謎を解く

新川拓哉 講師

専門は意識や知覚の研究を中心とした心の哲学。主な業績として、“*Illusionism and definitions of phenomenal consciousness*”, *Philosophical Studies*, 2020年。“A new experimental phenomenological method to explore the subjective features of psychological phenomena: its application to binocular rivalry” (共著), *Neuroscience of Consciousness*, 2020年など。

朝のまどろみのなかでコーヒーを味わうとき、あやふやな思考をどうにか言葉にしようとするとき、あるいは神戸大学から神戸の夜景を眺めるときなど、日々の生活のなかで私たちは多様で豊かな意識経験をもちます。私たちがコーヒーの香りを楽しめるのも、知的な興奮を味わえるのも、煌めく街の色合いに心奪われることも、すべて意識があるおかげです。他方で、怪我や病気に伴う苦痛や挫折や離別の辛苦を感じるのも意識があるためだと言えます。もし私たちが意識をもたない機械人形であれば、そうした生の喜びや苦しみは決して生じなかったでしょう。意識とは私たちの生に価値や意味を与えるものなのです。

意識には多くの謎があります。なぜこの物理的世界のなかに意識が生じたのか。私たちの脳と意識はどのような関係にあるのか。私たち人間の他に何が意識をもつのか—たとえば、虫や植物や人工知能は意識をもつのか。意識ある存在を人工的に生み出すことは道徳的に許容されるのか。他人の意識の

あり方を知ることはできるのか、もしできるとすれば、より詳しく知るためにはどうすればいいのか。意識とはどこまで変化するのか—たとえば瞑想しているときや催眠状態にあるときの意識はどのようなあり方をしているのか。意識は私たちにとって最も身近で重要なものでありながら、慄くほど謎に満ちたものでもあるのです。

意識の謎を解くこと、これが私の研究課題です。私は哲学者として心的概念の分析や心の形而上学に習熟していますが、それだけでは上記の意識の諸問題に取り組むには不十分です。そのため現在では、倫理学者や心理学者や神経科学者といった他分野の研究と連携しながら、学際的なアプローチで意識の諸問題に取り組んでいます。



後期サルトル思想、〈民衆法廷〉の実践

南 コニー 助教

専門はフランス思想学、ジェンダー学に関する学際的な研究。主な業績は「今、独自の普遍というあり方」(『第24回梶鳥敏賞受賞論文』)等。

私はデンマークのコペンハーゲンで生まれました。コペンハーゲンはシェラン島東端に位置する港町で、コペンハーゲンの名前は「商人たちの港町」という意味です。文字通り、神戸と同じく多くの船舶が行き来する美しい港町ですが、海運会社A.P.モラー・マースクの船長だったデンマーク人の父親の操縦する大型貨物船に乗って、数カ月にもわたる船旅をしたこともあります。私が生まれた当時のデンマークでは、日本でもよく知られているような高度な福祉の実現をめざした社会主義的な政策が取られていました。もちろんそこには、光だけではなく影の部分もあるのですが、たとえば性差による対等性 (sexual equality) はごく当たり前のものと考えられていましたし、なにより自由闊達な議論を可能とする文化的な土壌がありました。もちろん、議論するためには言語を習得することが前提になりますが、人口が600万人にも満たない「小国」デンマークの人間が生き残っていくためには、母語のデンマーク語だけでなく、英語を始めとする複数の言語を学ぶことが要請されていました。現在、神戸大学文学部でKOJSP関連の仕事を担当

していますが、英国だけでなく、さまざまな文化的・言語的バックグラウンドをかかえたオックスフォードの学生さんたちと意見を交換する上で、この「小国」デンマークの経験は大いに役立っていると確信しています。

私はジャン＝ポール・サルトルをはじめとするフランス現代思想を研究しています。とりわけ最近、サルトルがバートランド・ラッセルとともに1967年に主催した「ラッセル法廷」の研究に没頭しています。これはベトナム戦争のさなか、アメリカ軍の戦争犯罪を世界に広く知らしめるのにおおいに貢献した世界ではじめての民衆法廷で、ストックホルムと東京とデンマークのロスキレで開かれました。この裁判をめぐるサルトルの一連の言動に未完のままに残されたと思われる彼のモラル論の新たな展開がみられるのではないかと考えています。2018年にロスキレで開催された「ラッセル法廷」50周年記念シンポジウムを主催しました。現在、ラッセル法廷とこのシンポジウムを元にしたドキュメンタリー映画製作の国際共同プロジェクトに携わっています。

川尻秋生編著『古代文学と隣接諸学8 古代の都城と交通』 竹林舎 2019年4月

歴史学、考古学など古代文学に関連する論考をまとめた叢書『古代文学と隣接諸学』の第8巻として刊行された、日本古代の都城と交通史に関する論文集。飛鳥の宮都や平城京などの古代都城や地方官衙（役所）、水陸の交通に関して最新の成果をまとめ、広い視野から論じた論文19篇が収録される。古市は「ふたつの難波宮」として、飛鳥・奈良時代の二時期にわたって存在した難波宮の歴史的意義を検討した論考を執筆している。（古市晃）



ヒュー・ボーデン(佐藤昇訳)『アレクサンドロス大王』 刀水書房 2019年7月

古代地中海世界を席卷し、東西に跨る大帝國を築いたアレクサンドロス。世に知られたこの大王について確実に分かることは、実のところ決して多くはない。本書は古代ギリシア・ローマ世界で記された文献の歪みを修正し、旧来軽視されてきたアジア側の史料を積極的に用いて、大王の生涯、業績、そして彼が生きた時代と世界に迫ろうとする。入門的ながら刺激的な書物である。（佐藤昇）

M. Edwards and D. Spatharas eds. *Forensic Narratives in Athenian Courts*, Routledge 2019年8月

本書は2016年にダブリンで開催された国際会議の成果をもとに編まれた論集である。演説文化が発展した紀元前5～4世紀のアテナイでは、どのような演説が現実の民会場や法廷において効果的だと考えられていたのか。本書では、特に法廷演説におけるナラティブの用法をとりあげ、その修辭的機能について様々な観点から分析が加えられている。佐藤は法廷における野次の利用と原告・被告のナラティブ戦略との関係について分析を行った。（佐藤昇）



茶谷直人『アリストテレスと目的論』 晃洋書房 2019年9月

「万学の祖」と呼ばれるアリストテレスは、多岐にわたる思索の核心的諸場面において「テロス」（目的・ゴール）という知見を駆使しながら論述を展開しており、裏を返せば彼の哲学は「目的論の諸相」として捉え直すことができる。本書では「自然」（目的論的自然観）「魂」（アリストテレス流機能主義）「幸福」（幸福主義）という三つの「目的論の場」を設定し、彼の哲学の緩やかな統一像の描出と、関連する解釈上の諸問題の解決を試みた。（茶谷直人）



白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編『古墳と国家形成期の諸問題』 山川出版社 2019年10月

考古学者として古墳時代史研究に多大な影響を与えた白石太一郎氏の傘寿を記念して刊行された論文集。古墳時代から飛鳥時代という、古代国家形成期に関する考古学、文献史学の論考を収録。古市は「ニホツヒメ・住吉大神伝承と紀伊・播磨」として、従来取り上げられることの少なかった女神、ニホツヒメの伝承の検討を通じて、5世紀にさかのぼる紀伊と播磨の地域間交流と王権の重層的な関係を論じている。（古市晃）



澤田治・岸本秀樹・今仁生美(編著)『極性表現の構造・意味・機能』 開拓社 2019年11月

極性表現とは、肯定文か否定文かのどちらかでしか用いることができない表現である（例えば、「少し」は肯定文でしか使えず、「何も」は否定文でしか使えない）。極性表現は、言語学的に興味深い様々な特性を示すことが知られている。本書に収録された論考では、極性についての先行研究を踏まえた上で、統語論、意味論、語用論、歴史、言語獲得、コーパス等、様々な観点から、極性表現の構造・意味・機能についての最新の分析が展開されている。（澤田治・岸本秀樹）



西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一(編著)『言語におけるインターフェイス』 開拓社 2019年11月

言語学のインターフェイスに焦点を当てた論文集。「音韻論」「形態論」「統語論」「意味論」といった主要部門を一方の軸とし、別の部門との関連について扱った論考20編が収録されている。田中は編集とともに「特殊モーラ階層の二面性：外来語アクセントにおける位置算定と音節量決定」と題する論文を寄稿し、アクセント現象における撥音「ン」と長母音「ー」の非対称性について音韻論・形態論両面から論じている。（田中真一）



宮下規久朗『一枚の絵で学ぶ美術史 カラヴァッジョ《聖マタイの召命》』 筑摩書房 2020年2月

カラヴァッジョのデビュー作《聖マタイの召命》は美術史上の名画だが、肝心の主人公の聖マタイがどこにいるかで意見が分かれている。この「マタイ問題」をめぐる、「召命 Beruf」についてのマックス・ウェーバーの『プロ倫』のテーゼを紹介しながら、回心や殉教などの意味を掘り下げて説明した。一枚の絵を読み込むことによって、西洋美術の奥深さや美術史という学問のおもしろさがわかるという美術史学への入門書でもある。(宮下規久朗)



神戸市教育委員会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「神戸村文書」の世界』 神戸市 2020年3月

神戸市教育委員会と地域連携センターは、2017年から共同研究として神戸市立中央図書館に所蔵されている神戸村文書の整理、研究を進め、その成果を市民対象に開催した「神戸村文書を読む会」において公開してきました。本書はこの会で講師を務めた本研究科の大学院生、ポス・ドク諸氏がトピックを厳選し、古文書から見えてくる神戸村の人々の暮らしぶりをいきいきと描いたものです。院生たちの半端ない「史料愛」に是非触れて下さい。(市沢哲)



野間晴雄・山近博義・矢野司郎編『地図でみる城下町』 海青社 2020年3月

嘉永2(1842)年の城絵図集『主図合結記』収録分から66か所の城下町が紹介され、明治期と現在の地形図も示されている。城の立地、城絵図との対照、武家屋敷・町屋の配置などが解説され、歴史地理学の観点から城下町が案内されている点が第一の特徴として挙げられる。探訪の旅に誘うべく、まち歩きのみどころも示されている。本絵図集の作者は軍学者とされており、時代に流布した意味自体に関する考察は、今後の課題と言えよう。(藤田裕嗣)



佐藤信編『古代史講義【宮都篇】』 ちくま新書 2020年3月

日本古代史の諸問題を通史的に取り上げ、かつ平易に解説して好評を博し、シリーズ化された『古代史講義』の第3冊。ここでは飛鳥時代から平安時代に到る古代宮都、また大宰府や多賀城をはじめとする地方の官衙(役所)が取り上げられ、古代都市のありようが概観される。古市は「大津宮—滋賀の都の実像—」を担当し、飛鳥時代後期、白村江の戦いの後に飛鳥から移された近江の大津宮の研究成果を紹介している。(古市晃)



大阪市立大学難波宮研究会編『難波宮と大化改新』 和泉書院 2020年3月

長年にわたって難波宮の発掘調査を主導してきた大阪文化財研究所(現大阪市文化財協会)のメンバーと大阪市立大学による共同研究の成果。大化改新後の政治改革の舞台となった孝徳朝の難波宮(前期難波宮)に関連する考古学、文献史学の論考14編を中心に収録。古市は「難波屯倉と凡河内直氏」として、従来北河内地域の開発に関わるとされてきた伝承が、実は難波6世紀の難波地域の開発に関わる史料であることを指摘している。(古市晃)



森山卓郎・渋谷勝己(編)『明解日本語学辞典』 三省堂 2020年5月

日本語学、言語学の基本用語について、学生から専門家まで幅広い読者を対象とし解説した事典。音声、文法、意味、語彙、方言、歴史などの分野における200程度の重要概念について、1項目につき、2ページから半ページで解説している。田中は、このうち「母音」「子音」「音節」「イントネーション」「音素・音声」「音声学」「有声音・無声音」など、音声学・音韻論に関する10項目を執筆している。(田中真一)



文学部同窓会「文窓会」主催 ＜新入生歓迎パーティー オンライン＞

毎年恒例の文窓会主催「新入生歓迎ティーパーティー」は、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大対策のため、対面での中止を余儀なくされてしまいました。その代わりに、軽食・飲み物は各自用意し、zoomを利用したウェブ会議方式により開催を試みることになりました。奥村弘文学部長、武藤美也子文窓会会長による挨拶で、画面越しにパーティーが始まりました。はじめての試みで、戸惑うこともありましたが、増記隆介先生の名司会で、なごやかに進めることができました。まだキャンパスに足を踏み入れることができていない新入生に、少しでも文学部の雰囲気味わってもらえる機会になっ

たのではないかと思います。また文窓会の主催ということで、大学とその枠を超えたつながりがあることを知ってもらえたことも収穫の一つでした。

その後、zoom上で専修ごとのミーティングに場面を移し、新入生たちはそれぞれのセッションを移動しながら各分野の教員や先輩達との交流を楽しんでいました。文学部の専修決定は、1年次の後期に行われます。進路を決めるための情報集めがむずかしい状況で、今回のパーティーは、新入生にとって貴重な機会になったことでしょう。(古市)



神戸新聞に大型リレーエッセー「21世紀の人文科学」が掲載されています

2019年、神戸大学文学部は、1949年の創立から70年を迎えました。文学部は、哲学、文学、歴史学といった人文科学の伝統的枠組み、またそれにとどまらず、知識システム、社会文化という先端的領域をそなえた学部として、人類の知的遺産に対する理解に基づき、人間存在の深みを探る教育や研究を行ってきました。

創立70周年を記念し、神戸新聞文化面で、2019年10月から、「21世紀の人文科学－危機の時代を共に生きるために」

と題して、中堅・若手教員を中心に、月1回の大型リレーエッセーが掲載されています。リレーエッセーでは、21世紀前半の世界が抱える多様な課題について、執筆者から最新の知見に基づくメッセージをお届けしています。

連載に先立ち、2019年8月31日(土)神戸新聞朝刊の文化欄に、「21世紀の人文科学」を追求(副題:神戸大学文学部創立70年－教員座談会)が掲載されました。記事はインターネットで、神戸新聞NEXTからもご覧になれます。(古市)



人文と社会 神戸・復旦・北京三大学フォーラム

2019年11月8・9日に、神戸大学文学部・大学院人文科学研究科創立70周年記念事業の一環として「人文と社会」フォーラムが開催されました。

中国語担当のネイティブ教員として、復旦大学から神戸大学に最初に教員が派遣されたのは1979年のことです。その後途切れることなく、神戸大学文学部は復旦大学と北京大学から中国文学部の教員を招聘し、全学の中国語教育と共に文学部で中国語／中国文学の教育をお願いしてきました。この絆をもとに、広く人文系の教員と学生の間で交流をはかる「三大学人文フォーラム」が2018年北京大学で開催されました。その成功を承け、さらに神戸大学文学部創立70周年を記念するかたちで、今回瀧川記念学術交流会館において開催されたのがこの第二回人文フォーラムです。

今回のフォーラムでは初日に四つ、二日目には三つのセッションを設け、どのセッションにも三大学からの教員もしくは大学院生が一人ずつ壇上に立つという形をとりました。

ざっと内容を紹介しますと、第一セッションでは「文学史」の再編成を中心に、文化史を画期するものは何かという問題が扱われました。第二セッションでは近代における自我の確立について、小説、ドキュメンタリー映画、そしてドラマ映画という三つのジャンルから分け入る試みがなされました。第三、第四セッションでは「補史」という角度から、日中両国の文化史を埋める報告がありました。第三セッションでは

元代の音楽史、近代日本の政治史、中国南北朝の家族史、そして第四セッションではベンヤミンの歴史の概念、植民地青島における伝統音楽の創造、そして晩唐の詩人をめぐる政治状況が扱われました。

二日目の第五セッションではジェンダーが話題となりました。素材は中国映画における女性のイメージ、経済政策と女性の地位との相関性、そして一人っ子政策の遺産です。第六セッションは言葉の問題をテーマとしました。中国語における音律の問題、甲骨文に残る文字の問題、そして中国「標準語」の明代における変遷の問題です。そして最終の第七セッションでは宋代の文壇をめぐる裁判と、中華民国期の文芸雑誌とを素材に、文学を形作る制度と文体の問題が論じられました。

報告者の専門は文学・歴史・語学・教育・音楽・経済・映像など多岐にわたりましたが、社会と人文学を結びつける試みという大きなテーマで合致しており、学外からを含むべ100人ほどの参加者が集まりました。母語を基本に、時折人文学研究科の院生による翻訳チームに助けられながら、人文学の諸問題について話し合う貴重な機会になったと思います。最後には、両大学からの神戸大学への教員派遣とともに、この人文フォーラムも継続してゆくことを確認してから散会しました。

コロナ禍のため、2020年度の開催は危ぶまれますが、次は上海の復旦大学での再会を期しています。(濱田麻矢)



ステイホームとフィールドワークと

藤井 勝

今（6月下旬）、新型コロナウイルス拡大による緊急事態宣言は解除され、活動制限等も緩められていますが、私自身はまだ大半がステイホームです。

実は、ステイホームは退職後2回目です。1回目は退職早々に生じました。2019年4月に腰椎のヘルニアを発症して神経ブロック治療を始めましたが、数日おきに通院する以外、しばらくの間ほとんど自宅生活（ステイホーム）でした。名医の治療により、幸いにも7月頃から次第に外出できるようになり、順次調査等にも出かけました。

一つは、文学部の社会学研究室と豊岡市の共同による外国人住民調査への参加です。数年前に科研によってこの地域で行った国際結婚調査を踏まえて、私は、とくに東南アジア出身女性の聞き取りに注力し、女性たちの家族生活や子育てを考察しました。一部ですが、日本人の夫から話が聞けたのも収穫です。

もう一つは、小科研によるタイやミャンマーの地域調査の実施です。とくに、新型コロナが深刻化する直前の2月に行ったミャンマー調査は貴重な経験となりました。ミャンマーへの渡航は15年ぶり2回目でしたので、当然とは言え、ヤンゴンの大変貌ぶりに驚きました。今回の

目的は、知人のミャンマー人研究者の協力を得ながら、シャン州タウンジー県で地方社会の仕組みを調べることでした。私のフィールドである東北タイとの比較という位置づけです。シャン州には主要民族のシャン族（タイ-カダイ系）以外に沢山の少数民族が住んでおり、タウンジー県ではパオ族（チベット-ビルマ系）が、シャン族やミャンマー（ビルマ）政府との複雑な歴史的関係を経て、2011年より県内3郡から成る「パオ自治区」を形成しています（パオ族人口は6-7割、他にシャン族、ビルマ族、リス族など）。なお同県には、ダヌ族（チベット-ビルマ系）主体の「ダヌ自治区」もあります。数日の調査でしたが、パオ族やリス族の集落、そして「パオ自治区」本部なども訪問できたので、さらに研究を進めて、東南アジア大陸部の地方社会への認識を深めたいと思っています。

話を今に戻すと、コロナ時代は私にも影響が大です。多くの現地調査が困難なことはもちろん、研究の立ち位置の見直しさえ必要かもしれません。退職後このような時代に巡り合うことはまったく想像外でしたが、前向きに受け止めながら日々を送りたいものです。

編集後記



作業中の小野塚研究員

新型コロナウイルス（COVID-19）は、神戸大学の教育・研究にも大きな影響を与えています。4月に予定されていた新学期の開始を5月に遅らせ、授業は基本的にオンラ

インで行うという、前代未聞の取り組みが文学部でもはじまりました。桜が満開になっても新入生を迎えることもできず、在校生も入構できない状況で、イベントも軒並み中止、人気の絶えたキャンパスは静まりかえってい

ました。講義のオンライン配信やzoom会議などといった、少し前までなじみのなかった言葉が飛び交い、教職員は対応に追われました。

そうした状況で、授業や学生の遠隔指導に導入したウェブ会議システムの調整を、こうした技術に堪能な小野塚浩一・学術研究員にお願いすることになりました。小野塚さんの奮闘のおかげで、システムは大きなトラブルを起こすこともなく、前期を終えることができました。

後期からは学生の入構条件がやや緩和され、対面の授業も一部で再開されていますが、今後の展開によっては予断を許さない状況が続いています。学生たちが変わらぬ日常を取り戻す日が来るまで、皆様的一段のご支援をお願いいたします。（古市）